神戸市外国語大学 学術情報リポジトリ

ディケンズとユーレイニア慈善

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2022-06-17 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: Konishi, Chizuru メールアドレス: 所属:
URL	https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/2630

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

小西千鶴氏博士学位請求論文
「ディケンズとユーレイニア慈善」審査要旨

ヴィクトリア朝を代表する小説家チャールズ・ディケンズは、慈善家アンジェラ・バーデット＝クーツ（以下クーツ）からの依頼と資金提供を受けて、売春婦の更生施設ユーレイニア・コテッジを 1847 年 11 月にロンドンのシェパーズ・ブッシュに開設し、その実質的な運営を担うことになった。小西千鶴氏の論文は、ディケンズが同コテッジでの慈善、すなわちユーレイニア慈善に携わった 1846 年から 1858 年の間に刊行された５つの長編小説を取り上げ、この事業が彼の創作に与えた影響を探る。ユーレイニア慈善の影響についてはすでにジェニー・ハートレーやノリス・ポープなどが論じている。しかし、従来の批評が受益者である売春婦とその表象を論の中心に据えたのに対し、資金提供者クーツと実際の運営に深く関与したディケンズとの複雑な関係に焦点を置いたところに、本論文の着眼の斬新さがある。

クーツに関する資料は未公開のものが多く、ディケンズとの関係も未だ十分に研究されているとはいえない。その中で、小西氏はディケンズがクーツやそのガヴァネスに宛てた書簡はもとより、大英図書館が所蔵するクーツの秘書チャールズ・オズボーンによる文書などをも含む数多くの一次資料や、ディケンズや慈善に関する二次資料を渉猟し、慈善を提供する側のディケンズとクーツの思想や心情の共通点と相違点を洗い出した上で、両者の共感と葛藤に光を当てる。そして、幼少時に父親の破産と債務者監獄への収監によって家庭の崩壊と労働者階級への転落の恐怖を味わったディケンズが、自分と同じく秘匿すべき過去を持つ「堕ちた女」にホームを与える慈善の試みを通して、自身の過去とも向き合い自己認識を深めていく過程を、作品に示された様々な矛盾や葛藤から読み解いてみせる。ユーレイニア慈善に関する歴史的事実と作家の伝記的事象、そして作品解釈の三つの視座のバランスを巧みに保ちながら展開する本論文は、博士学位請求論文に必要な堅実さと説得力を十分に備えている。

序章において、ディケンズにとっての慈善事業のあり方とその意義を彼の生い立ちとの関係を交えて示した後に、第１章では、ユーレイニア・コテッジ設立に至る経緯とクーツやディケンズの運営方針の特質を、マグダレン・ホスピタルをはじめとする他の売春婦更生施設との比較を交えながら明らかにする。第２章は、ユーレイニア・コテッジの設立と同時期に執筆が始まった『ドンビー父子』を論じる。作品内で描かれる新旧の世代交代あるいは相互理解のテーマを確認したのち、父子商会の継承をめぐって繰り広げられる、専制的な主人公と彼を脅かす女性の力との葛藤と融和に目を向ける。そして、ユーレイニア・コテッジでの売春婦との直接的な接触によって自身の過去と向き合うことになったディケ

ンズが、女性でありながらクーツ銀行の莫大な資産を継ぐ資金提供者として支配的な立場に立つクーツとの意見調整を通して、自身の価値観やジェンダー観に潜む矛盾に目覚める過程を辿る。自伝的な『デイヴィッド・コパフィールド』を扱う第３章では、ユーレイニア・コテッジにおいて更生した入居者の最終的な落ち着き場所と設定された海外移住に関する事実を、物語に登場する「堕ちた女」であるエミリーやマーサの海外移住の背景として詳細に検証する。そして、彼女たちと共にオーストラリアに移住し成功するミコーバーに、ディケンズが父ジョンの姿を重ねていることから、ユーレイニア慈善で売春婦の履歴の聞き取りをした経験が、ディケンズに自身の過去のトラウマと向き合い、内省をもたらした可能性を読み取っている。本章は従来の安易なご都合主義的大団円という評価とは異なる、物語における海外移住の意義を解き明かしている。第４章の『荒涼館』論では、作品を特徴づける二つの対照的な語り手の存在に注目し、ディケンズが女性であるエスタに自身の価値観を託して語る意図を、クーツとの関係において彼が経験したジェンダー・ロールの転倒の意識と、彼自身のユーレイニア慈善における運営方針や価値観の揺らぎに見出す。第５章では『ハード・タイムズ』が取り上げられる。一般に、この小説は功利主義的なグラッドグラインドの教育を批判するために書かれたと考えられている。しかし、本章では作品におけるディケンズの主張と、ユーレイニア・コテッジでの売春婦に対する教育や息子チャーリーの教育という二つのホームにおける実際のディケンズ自身の教育方針との齟齬に焦点を当て、そこから作家の慈善に関する意識の変化や矛盾を明らかにする。そしてディケンズがユーレイニア慈善から撤退する直前に書かれた『リトル・ドリット』を扱う第６章では、アーサーやミーグルズのような善意の登場人物をも含め、偽善や独善など慈善の否定的な側面が強調されることに注目し、そこに、ユーレイニア慈善の結果が明らかになり始めたこの時期に作家が味わった失望と自身の運営方針に対する反省、さらに新たな慈善と自己確立の可能性への示唆を読み取っている。

このように、ユーレイニア・コテッジというホームの構築を目指す慈善事業を、作家自身の過去のトラウマの克服と彼自身が理想とする家庭の構築という自己確立の衝動と重ね合わせることで、小西氏は慈善事業が作家にもたらした内的葛藤と自己認識の深まりを浮き彫りにする。しかも、そうした伝記的要素に重ねて、慈善を提供する側のクーツとディケンズの協働と対立、そしてそこから浮かび上がってくる作家自身の矛盾に注目することで、ジェンダーや海外移住、家政や教育といった作品執筆当時のイギリスにおける重要な社会問題に新たな光が当てられる。その結果、本論文はディケンズ文学におけるユーレイニア慈善の重層的かつ包括的な意義をあぶり出すことに成功している。丹念なリサーチに支えられた歴史的伝記的事実の詳細な記述を大きな破綻なく作品解釈へとつ

なげる論の展開は、文化論的文学研究を目指す小西氏の力量を証明するものである。

売春婦の秘匿すべき過去を作家のトラウマと重ねる小西氏の視点は、たとえば半自伝的な『デイヴィッド・コパフィールド』を執筆するに至った経緯や結末に置かれた海外移住に関して新たな解釈を導いてはいる。一方で、本論文では、売春婦に対する作家の姿勢を善意や共感にのみ限定しているため、女性の人生をコントロールしようとする男性作家の密かな支配欲や、モラルを超えた人間の情念への目配りが不十分となった恨みもある。ジェンダー論をはじめとする現代批評の理論的裏付けを効果的に用いることで、たとえば『荒涼館』における「書く」行為と「読む」行為をめぐるディケンズとクーツの対比に関する指摘など、本論文に提示された興味深い論点を更に掘り下げ、一層深みのある作品解釈へと導くことも可能となるかもしれない。また、状況からの推論のみならず、当人の書簡等における直接的な言及がさらなる傍証として期待される箇所や、誤表記を含む文章の推敲、細部における用語や日本語表現の一層の明確化を望まれる箇所もいくつか見られる。

しかし、大部のディケンズ小説をユーレイニア慈善以外の時期に執筆された作品をも視野に入れながら丁寧に読み込み、書簡、伝記、批評書のみならず、関連分野に関する膨大な資料に真摯に向き合いながら、ユーレイニア慈善の社会的個人的意義の多様性を、従来の議論とは異なる広やかな視点から、説得的に論じていることは確かである。さらに、細かい背景事実の記述と作品解釈とのバランスをとりながら、ディケンズの小説自体の興味深い解釈を多数提示できている点も評価すべきだろう。とりわけ、『ドンビー父子』におけるフローレンスの存在意義や、『荒涼館』の女性の語り手エスタに男性である作家が自己を投影するといったジェンダー・ロールの転倒の意識など、当時の家父長的な思想の枠組みに収まりきらない女性像や、女性のあり方に対する作家の意識の揺れを示唆する解釈は、興味深い。以上の点から、正当な研究方法と高い能力に支えられ、期待された成果を十分に備えた論文であると結論できる。

最終審査は、2022 年 2 月 18 日午後 1 時 30 分から zoom によるオンライン公開形式で行われた。申請者の小西氏が論文の主旨説明を行った後、新野緑（主査）、光永雅明、吉川朗子の本学教授及び大西寿明本学准教授と、ディケンズ研究の専門家である同志社大学の玉井史絵教授から成る 5 名の審査員によって質疑応答がなされた。上述した審査員からの評価とコメント、フロアからのものをも含めた質問に対して、申請者からは、日頃の真摯な研鑽と専門領域に関する豊富な知識を感じさせる明快で説得力ある応答がなされ、審査終了後、審査員全員で協議の結果、博士学位請求論文として十分な内容を備えているとの合意を得て、申請者の論文を合格と認めることが決定された。